

相生集

二三

共拾本

百六十二

內務省圖書  
 第一〇三五一號  
 和書部地理類  
 第三五九函  
 共十冊

和書門  
 八九六六號  
 一〇三函架  
 一〇六冊架

內閣文庫	
番號	和 8966
冊數	10 ( 1 )
函號	174 319

319  
 內閣文庫  
 和書類  
 八九六六號  
 一〇三函架  
 一〇六冊架



題相生集

相生集二十卷。大鐘義鳴所著。二本。松封內

川郷里沿革。以至古今人物事跡名區勝

蹟。凡史傳漫錄。苟有關係者。蒐羅不遺。隨加

考證。在資聞見者。開卷即得。在探事實者。從

求而足。其用心之精。且勤甚。可嘉尚。如廣之

其益。人豈淺淺哉。但有意不示。是以人莫

知也。雖然。物之顯晦。有其時。必待久遠而

定。珠玉不空埋。棟樑不徒朽。况於書之最

有。用於世者乎。由此言之。此編今雖沈晦。其



顯於異日也。審矣義鳴其可以無恨也。因憶  
二十年前見義鳴文數篇以為亦拾華擷英  
以求時名者豈意有著述出人如是者。噫余  
年既七十矣。今不見此編終不知義鳴也。嗚  
呼人之難知而易失每如此。以目擊間毀譽  
取舍其人者可無戒歟。

天保壬寅季夏中澣

惺齋識



序

邦國有地志。蘇漢之通典。我曰風土記。彼曰  
地理志。其揆一也。所謂風土記。蓋出元明和  
銅之制。當其時典章未完。制度未備。而既有  
此令。則其為至貴之書。可知也。然年代遼遠。  
其書散逸。傳今者乃存什一於千百已。如陸  
奧。賴有殘簡存。而吾郡則亡矣。讀者不能無  
遺憾焉。成田友鷗翁。嚮著松藩輿志三卷。粗  
擬風土記。可謂補其闕矣。但探勝槩而遺事  
證。覓往蹟而軼履歷。蓋俟異日之攷也。余因

謂<sup>コト</sup>因<sup>テ</sup>此書<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>加<sup>フ</sup>訂補<sup>ヲ</sup>亦<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>闕<sup>ク</sup>之<sup>レ</sup>典<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>  
是<sup>ニ</sup>旁<sup>ニ</sup>求<sup>テ</sup>徧<sup>ニ</sup>索<sup>シ</sup>凡<sup>ク</sup>有<sup>リ</sup>關<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>者<sup>ヲ</sup>輒<sup>チ</sup>採<sup>テ</sup>而<sup>レ</sup>録<sup>ス</sup>此<sup>ヲ</sup>  
改<sup>テ</sup>稿<sup>ヲ</sup>數<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>釐<sup>メ</sup>為<sup>ス</sup>貳<sup>ニ</sup>拾<sup>ニ</sup>卷<sup>ニ</sup>命<sup>メ</sup>曰<sup>ク</sup>相<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>集<sup>ニ</sup>夫<sup>レ</sup>  
封<sup>ニ</sup>疆<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>闕<sup>キ</sup>事<sup>ノ</sup>物<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>疑<sup>キ</sup>豈<sup>ニ</sup>淺<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>薄<sup>ニ</sup>聞<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>能<sup>ク</sup>  
盡<sup>ス</sup>哉<sup>ニ</sup>雖<sup>レ</sup>然<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>觀<sup>ニ</sup>風<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>概<sup>ニ</sup>畧<sup>ス</sup>亦<sup>レ</sup>未<sup>ク</sup>必<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>少<sup>ク</sup>補<sup>フ</sup>  
也<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>夫<sup>レ</sup>戶<sup>ノ</sup>口<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>衆<sup>ノ</sup>寡<sup>ノ</sup>聚<sup>ニ</sup>稅<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>少<sup>ノ</sup>則<sup>チ</sup>輿<sup>ニ</sup>  
志<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>載<sup>ス</sup>亦<sup>レ</sup>刪<sup>ス</sup>之<sup>レ</sup>聊<sup>ニ</sup>避<sup>ス</sup>隱<sup>ニ</sup>忌<sup>ヲ</sup>耳<sup>ニ</sup>讀<sup>者</sup>幸<sup>ニ</sup>  
察<sup>ス</sup>諸<sup>ヲ</sup>

天保辛丑季春

大鐘義鳴識

例言

義鳴嚮小松藩與志を訂補一テ松藩差當とらん  
名はけりしをいれどもやそむけりしをいれどもや  
當違はまかり末下りしをいれどもやあつた考しり  
見せらるる一はしをいれどもや強一筆一はしをいれどもや  
なれは二本は松藩御札のびいひおこ一はしをいれどもや  
はしをいれどもやおと集と一はしをいれどもや  
我ッ二本は松藩のおしき一はしをいれどもや  
ありりれ

一はしをいれどもや  
ルはしをいれどもや  
こはしをいれどもや

一 若くは與地の例に依りて村毎に山川古跡を記し  
砂をわつちたれととたむとたむたの川土地の例に  
一 與志と西邊といふ上巻と一 東邊といふ中巻に  
書籍を以て下巻と一 たれを今も村證林林例に  
よりて記す

一 川用林裁籍のたとひ記し録れ、有、中、傍、  
つ、少、原、引、せ、と、友、と、お、の、お、一、二、お、一、一、と、林、  
義、傳、の、自、り、の、事、書、也、見、る、と、の、を、事、書、名、の、侍、  
赤、出、り、の、口、点、を、附、て、是、を、その、お、は、是、を、人、と、事、書、を、  
録、し、その、所、を、何、か、ぬ、ど、ぬ、わ、う、と、し、は、た、事、  
法、原、一、一、もの、と、と、う、ま、た、れ、か、り、り、  
一 土、原、と、人、物、と、用、俗、と、と、事、書、一、事、書、志、だ、と、ら

かりその法を一 坊、寺、一、部、一、部、一、部、門、を、お、  
の、お、法、補、を、補、つ、と、

一 物異記とち法地志の、見、る、と、れ、ど、し、と、異、地、  
通志とち、祥、記、法、記、一、準、一、なり

一 引、書、多、く、れ、を、受、法、也、を、要、と、し、ラ、志、れ、海、の、  
あり、み、を、事、書、の、ま、あ、り、と、力、り、録、碎、の、と、し、  
ら、ぬ、と、是、が、故、あり

一 事、法、系、下、引、書、法、名、を、多、く、何、り、一、法、と、此、を、  
更、一、考、た、を、何、の、法、書、毎、り、一、事、文、有、る、と、非、に、

一 佛、割、法、沿革、と、名、勝、志、村、鑑、大、概、記、遊、沈、志、寺、  
隱、集、日、由、事、を、一、所、た、り、し、と、け、テ、多、く、れ、  
是、の、ゆ、え、と、り、と、事、書、名、を、記、し、





仙道表鑑

本代氏著

金花抄

沢井氏著

奥羽春秋

多田國房著

古館兵

安田元長著

館基考

友鷗翁著

仙道記

丹羽允能著

小濱上館菓記

友鷗翁著

雄藩雜話

上田氏著

寛永書上写

友鷗翁著

元和書上写

同上

安積仙道記

實之和書上写  
吉田守祀著

重編小松軍志

他未詳悉  
本代成三

隨筆類

富翁雜話

藤沢氏著

同餘稿

同上

諸説録

矢島氏著

古事録

中村比全著

古事談

以徳履友  
以善記

遊藝堂筆記

友鷗翁著

同次集

同上

同三集

同上

田間漫録

同上

五六園隨筆

丹羽秀敏著

後彫園隨筆

畠英圃著

廻村記

服部大入著

譜類

御年譜

和田氏著

御重筥譜

友鷗翁著

松藩紀年便覽

内友氏著

御系圖畧

友鷗翁著

西厩雜録

友鷗翁著

紀行類

東鄙草

磯村氏著

驛燈隨筆

岩井田翁著

江戸行程記

松井氏著

記類



本早谷記 雲堂徳撰  
安達太良山記 水宮万象撰  
吾田太良山記 嶽東院人撰  
野澤記 服部六人撰

縁起類

三神縁起 君平哲氏撰  
温石山真字縁起 小見岑著  
称念寺縁起 同上  
畠山縁起 同上  
安積沼假名畧説 同上  
真弓山縁起 同上  
東勝寺縁起 同上  
祖栖山縁起 同上  
栗柵八幡由來 峯友親著  
全假名縁起 友崎翁著  
相應寺縁起 同上  
弘誓山縁起 同上  
日畧縁起 同上  
法華曼陀羅縁起 同上  
棚倉山縁起 同上  
水宮明神縁起

蛇塚由來 本宮深草寺撰  
積達寺院集 田邊氏著  
永松山真字縁記 友崎翁著  
友崎翁著

家譜類

氣地氏系圖 根崎河内撰  
遠藤辰七家譜

圖類

國城圖 友崎翁著  
與地全圖 下河邊氏撰  
白川府内圖 友崎翁著  
畠山居城圖 友崎翁著  
重訂國城圖 天サキ公爾著  
府下全圖 松平氏著  
郭内屋敷割圖 三浦氏著  
加藤家居城圖 同上

雜書類

田園雜事

吉田守紀著

遼年類志

日人著

骨不知短刀由來

松井氏撰

江村氏抄

友崎翁著

安達結

水代氏著

大嶽禪師語錄

友崎翁著

松府詞藻

奧澤翁著

會津御在番記

友崎翁著

童草

友崎翁著

霞城新語

友崎翁著

花勝見考

田邊氏著

水綿布子

友崎翁著

花勝見考

本宮眞之著

石井考

友崎翁著

安積山考

中野氏著

靜戸考

同上

安達太良山名義考

中野氏著

高木村名義說

同上

安積國名義考

友崎翁著

思塚考

友崎翁著

猴骨記

中野氏著

雙安崎人錄

友崎翁著

南村田村一和著

南村田村一和著

南村田村一和著

南村田村一和著

碑文類

熱海温泉碑文

鉄房橋碑文

葛城王碑文

大橋高就碑文

以上中篇諸書著者なり。又あだ一回作中のるがらも

たゞし本和たり。諸事小字記也。

仙道弓矢卷

道齋物語

蒲生記

東國太平記

藤葉盛衰記

會津家合考

永慶奥羽軍記

奥陽軍秘録

奥相茶話

管規武鑑

都忠津登

回國雜記標註

奥細道

奥細道

東遊雜記

東國旅行談 東遊奇談

游奥曆 遊東陬錄

信達古語名所記 信達一統志

蒲生宰相支配愷 五十四郡考

增補奥羽名所歌集 金我文集 五十四郡考辨疑

和漢三文圖會 奥相部 觀迹間老志

國家万葉記 二本松考 人國記

奥羽西國圖 仙藩保田氏書蹟 青田原陣營圖

加藤家知行附 松藩客中日録 伊東系圖 東奥輿地贅志

花勝見通考 花徑樵話

日派の下四郡と忘年の友大谷士由氏著其その日派は如きハ士由を以て  
より東國輿地贅志と編其著人は久高を以て以て其夫ハ其地

古傳と因りゆりし書其地は實と信するもの之別あり

會藩若中日派考ありき其地集の地はゆりし書其地は實と信するもの之別あり

公の地は其地は實と信するもの之別あり

説平次人仕年其地は實と信するもの之別あり

法誠持覽多葉書其地は實と信するもの之別あり

詳ふし

是外山百餘ありしをふるふしきりるるを編を見し

知

附言

郭曰此山川古往之要害地なりかつらひしは

中流なりしは波をさしりて流るるなりしは

手形ふりせ川はありせとあはらちはらちはらち  
一俣更に地味をこきしお流をたうこををいほを  
はーたれはらうこをこまこーつぎーふ求地  
那あに一俣更に地味をたうこをこまこーつぎーふ求地  
石井北水地をこし中流の事のみをり中流の事のみをり  
我、邦人地味記一書をたうこをこまこーつぎーふ求地  
がともしれはらうこをこまこーつぎーふ求地  
人おをたうけりはらうこをこまこーつぎーふ求地  
よるをたうけりはらうこをこまこーつぎーふ求地  
ふしはらうこをこまこーつぎーふ求地

天保二年三月

河内巻地主人誌

相生集巻第一稿

外史

大鐘彌兵衛藤原義鳴輯



提要

二本松地味をたうこをこまこーつぎーふ求地  
吾田太良山をたうこをこまこーつぎーふ求地  
福麻河をたうこをこまこーつぎーふ求地  
地味をたうこをこまこーつぎーふ求地  
市屋をたうこをこまこーつぎーふ求地  
いひ龜谷といひ竹田といひ根崎所といひ属所

是を府下の六州と云ふ高貴郡所一之坊を安  
毎月九回二は七の市を設け力を通に因りて官送  
此郡次より管下之郡不謂安積郡達信是より属也二  
熊疆城城と會津長沼守山相馬福原等不梅より年未江平不  
少より平高里元年奥相馬國不れを白川不少より十少り其高里  
原不より指原里成矣是法不より梅より以上は方信和漢多  
己年之春不より少里中申會津不より梅より宮原  
福原不より少り仲少不より少形をり以上奥相馬少りて  
方信と云ふはまた高里  
地壤膏沃東遊記絶不和松原之原不より八少りの傳り  
人相言及山川若東也中國不里相七年卒をりて一之少りての之知り  
おとす也松原と云ふは松原を指す也此地は日知傳集三高松也  
諸は且松原に利あり士民此風氣大也法筋をより之  
俗も又一ありは二和松此原之府城此中丸不靈松原



方不任テありと云ふ是より松原と云ふは詳なりは  
霜原翁此原不より角山高高四此時東遊記法源在と云ふ  
高より一之稱此原不より三之稱を城申す後一梅を  
二和松と名つけ残り日本有力原不也を和松と稱す  
是和松事不原松方より不之原村 梅不は松原と書し石松原  
是和松事不原松方より不之原村 梅不は松原と書し石松原  
此原城と云ふ遠不東遊記此原城と云ふは二より東代也  
石勝志少之東遊記此中御下河武隈川方よりテ南より  
小一流れを川法東と云ふ和松といふ川西と云ふ和松といふ  
其原と云ふ城山より靈和二和方よりテ在るはテ雄雄を述  
縁原志法一古法城主是を説一テ原此原不を和松  
石付テ二四一和を二和梅を原不石付と云ふと方より  
より後一其事をいふは人をとてむ一其原一法方より義治事あり



此の志は或は名を記す方より中野縣に於て府縣とす  
法書に記す所ありてなるべしと云ふに別處ありて法を解する所なり

### 三郡建置考

畢記偽筆  
考ふに二郡  
考ふに二郡  
考ふに二郡  
考ふに二郡

四事紀國造本紀阿天必造法系志賀高穴穗朝御世所岐國  
造同祖天湯津彥命十世孫比止稱命定賜國造とあり是を  
始なり其時秋小豆を成勢帝五年九月法回令一國造也  
されと五年と  
一國と也 又見由 安積郡按古辛酉郡考成勢如分其地定以為國者八日阿  
陸奥國一廢四國以為屬郡蓋出孝德大化之制云云 和名抄以下亦按古戸令云凡郡以千  
の里以上為中郡四里以上為下郡二里以上為小郡 又日本紀孝德帝二年此詔小郡  
以里重為大郡以十里以下四里以上為中郡三里為小郡云云今安積之里數を沙羅  
二書ふに中郡為大郡一沙羅云云 成勢帝八王十二代小郡を沙羅と  
まゝに小郡を中郡と為す

其五年より天保十年 少少通計一千七百五年小郡也  
少少通計一千七百五年小郡也

### 安達郡

民怨式標証 延喜六年正月 安積 積法系の形  
郡置安達郡を按ふる小戸令義解小謂郡不得過千戸  
若餘五十戸以上者隸入此郡地勢不便或不獲已而應分  
者別録申官其定國大小可有別式と云ふに安積郡  
法氏戸著延一テ千戸小少あり一とあり一郡  
とせられ一とせん。延喜五年より九百年迄年

### 信夫郡

旧事記信夫國造地系一志賀高穴穗朝御世阿尺國造

同祖久志伊宇命孫久麻直定賜国造  
奥羽春秋は是王成務帝五年此事と云

同治草考

安積

旧事紀ふ多し阿尺と書られん古と志の書たりんといつれの  
涉り安積と改免し一少や未し考されとも統紀元  
明天皇和銅六年 五月畿内七道諸国郡郷之名著好  
字又民部式に凡諸国部内之郡里等之名并用二字必  
取喜名るんといわれは是皆法沿通を法好字ふ改免  
られし一 積をさしめ訓スルハ万葉集之廢ル身法詞ふ而積之訓考  
也昔法好字を法加と訓し十量法言ふ可なり百十量廢文  
阿尺と字安積とせんといふは阿尺ハ八雲山抄を始め法好と

書し一と法好と訓より如たり一先とて安積法言り  
河とさうて法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
加文字とさうて法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
同法番ふんといふ法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
といわれ法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
みたりと法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
積番と書たり一 法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
三文字とし別安積番ありて郡里は名二字を用ふよとの  
制ふかちと法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
者といふん少きとさうて一節用集ふ古称阿久と書  
たりと傳字法好と法好と訓るを阿佐と書し一  
とて安積と書たり一訓たりと法好と法好と訓るを阿佐と書し一



厚名に福ふり  
郡名考ニ云和書ニ熟スル人故云六国史ナリ日本紀法  
假名信用ニニ統日本紀ヨリ下ノ五史のなるに安彦神名  
帳此假名ニ名後人故 安積親王統紀云  
カクシのハシヲ云々 安積親王統紀云  
万葉 安積親王頼嗣之臣  
出東鑑 是レアハト  
よまはれとも云々我書録ニ始有  
安積安達信夫と有り此安積之形を阿也とヤリ七  
訓七云々の一なり

安達

万葉考云畧解ふあはふと云々厚名を信ふ安達と云ふは  
和名抄安達取と云ふはんと有り物事古集大  
新抄内一云ははしくは阿也のまゆみと云々  
古考云延元三年二月分安積置安達と物レ丸  
もとも阿也なりちあふと有りテの免るなりと云々

新考抄詞一云れを去例考は如くあり

信夫

統紀ニ養老二年二月割白河石脊會津安積信夫  
五郡及常陸國多賀地名曰菊多郡云々又式ニ延喜  
六年割安達信夫置伊達郡云々此外之沿革イマタ  
考ヘス

安積

和名抄阿佐加云々サテ此名ノヨミヲ以のふん知るがれ  
と府下法司被安積親重考云安積回送此止  
孫命換世孫神天湯津彦命あり抄書をひらうれテ

吾福國子カカよりあひいりしうアカ法進アなれハアサカと不  
 りんといふいふおしし法を法多れ九湯津彦法此  
 國よりしられし一先何法授ふらぬらんこと安移法進遠  
 比止秘命法祖多法多し中ひよりた多ふや老護りし昔景  
 平然不知其何故為吾宗也待後人補とあり  
 我鳴いしらく安達信夫法名ふ日本武尊之故事  
 より起ちるらん士由考たふらんておひり  
 此安移法名も日本武尊東征伐法時こ法進ふ山コハ後  
 延平村ありカサアのひり指非法山用脚まし法進言と眺  
 中よりいし法進遠く法進りた多を何れ  
 おひりし碓氷峠テ昔々鳴半放奴カカリ又万葉弟元九ノ頁  
 未ルキ化りミト言フ長壽法中顧為騰弥遠尔里者放奴云々又十三玉命恐見

不記畧昔過往者弥遠母里離如  
 云ミト有ル詞ト意トフ味思フハニ  
 毛山法進名をアサカトサカルヲサカト訓スルハマ中ノ也諸国名考小佐後ハ  
 名付たをそめり法地あり放ちし郡名ありおとまたり  
 小多あふささぬ日本紀ヲ案ス日本武尊則從上総轉入陸奥國畧蝦夷既平自日高見  
 額取山古法官道ナリと云還之西南盛常陸至常陸國ニ是尊之東下陸奥ニ今ハ明證ニカマ  
 時百法進人喜識カカミツキる樂あがりしう阿佐者也  
 名付たを安則出雲國佐香殿七百八十神等之集坐ラ  
 喜識テ散坐サカミツキたりし法進ありし風土記に見えたり  
 おひりし法進と云ふ法進ふのこ又士由説松菴著小法  
 安積郡と安達田村郡より土地ありしけ山あり水田  
 多く肥沃地なり所於日のたきたふ夕日法進也  
 玉といひし法進地あり和名抄伊勢國法進中



承和と云く... 日本紀... 天皇本紀... 清寧帝... 二月天皇詔以物部

水蓮子... 畧自陸奥出津輕茶生云云... 承和と云く

已士由と日本武尊... 東下流... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

信山... 信山... 信山... 信山... 信山

城主歴代考

創業

高国

源姓和 畠山氏義人又上野介小右衛門信元小  
余多時小因ありて諱姓一字とゆゆり新と不  
源氏家臣位純高是利上総介源氏兼堀男是利と  
後五位下遠江守父純之男後五位下畠山三郎泰四純  
嫡孫也父と下信守所因とす小歴應三年十月上野介  
小任一 奥州探題と一 二平和子下向とゆゆり  
觀應元年 弓是利尊氏公之弟也と 汗指不及  
い由義と南於小属せし 時之國法族也宗系  
夕年一 誅せり新探是高國とす 武家とを  
南於一 功徳一 日々二年二月十日探題左近

貞家と成て子玉氏及い家の子松作法軍一人  
とある一 貞家と松作記名勝志全義抄事跡考館基考  
松澤善隆池遊覽志参考下  
國氏

高國の男右馬掾法法所中務大進とす是は父の  
子とを端り一 たり父老と成とあり 吉良貞家

同日探題たり 觀應二年二月父及い弟忠泰らと  
あり 戦記  
極雲池遊覽志 奥羽春城  
事跡考 館基考 善隆記

三回より討死せし 觀應二年 國詮の箕業を  
應永二十年 延六十二年 法向二弟和を空傳とあり

中央一 八道統統滅らり 善隆記の父とあり

中興

國詮

國長の男知名大石丸後次郎又修理左衛門少輔より  
 法名称名一不念化古殿道甫と号す又詮公此一ををを  
 たりしと聞ら自叙其始知一テ筆端有氏小幡本られテ  
 會棟那摩納邊邊りしと云々一源心名勝志 金花抄 館基考  
 此不應永永年管領坊氏始命ふよりテ國詮大軍政  
 事ハ奥州小下向一對陣好リ一テ中造の家僕  
 リ一しれり二本松地城を授け一後重能一れをそてヨリテ  
 二本松一地城一テ再ハ又地城を副一探題たりと  
 見一由館基考卒年未考善房記文和三年月日探題補一應永  
 七年二月廿八日卒一ト有ルハイタク一考カヘリ

○國詮知能會降小一し一と云一成長地後國東不  
 越一き一是利一多一少一仕一テ一後一多一仕一法一命一と一を一し一り一  
 有一由一館基考

守成

満泰

修理左衛門從四位下實一と云一詮の二男一少一大井田満少一の弟  
 有一り一と云一れ一と云一由一國一と云一服一備一泰一と云一編一股一を一れ一高一山一を一修一  
 義備一法一字一を一少一り一テ一探一題一たり一文安五年辰年三月十五日  
 卒一法一字一稱一念一寺一殿一通一泰一良一後一名勝志 金花抄 事跡考  
一遊一覽一志一館一基一考一

以上四代奥州探題タリ

持泰 一不持

修理大夫治部少輔宮内大輔實滿泰之二男なりと云

満盛早世ヨリテ少少を継ぐ致持と法一字を少とす

と云ふ文明二年癸二月十六日卒ス法号是阿良原

金花抄 遊覽志事臨考 館基考 普度記 ○花巻之代記云應永二十二年 畠山道瑞

亭<sup>ハ</sup>御成<sup>ハ</sup>少依<sup>ハ</sup>の列<sup>ハ</sup>畠山修理<sup>ハ</sup>兼七<sup>ハ</sup>部<sup>ハ</sup>持<sup>ハ</sup>と云

少人<sup>ハ</sup>多<sup>ハ</sup>厚<sup>ハ</sup> 館基考

政国 一不政

持泰法男之修理兼と云ふ政と法一字を少とす

明應三年 甲寅三月十八日卒ス法号自勝 金花抄 遊覽志事臨考 普度記 館基考

○義鳴拙<sup>ハ</sup>了<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>皇朝史畧<sup>ハ</sup>天文十六年義晴細川晴元  
法曹安<sup>ハ</sup>忍<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>テ畠山政<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>と云ふ法<sup>ハ</sup>と云ふ  
了<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>由<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>政<sup>ハ</sup>と云ふ<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>直<sup>ハ</sup>二年<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>卒<sup>ハ</sup>廿<sup>ハ</sup>と云  
と語<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>進<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>考

村國

政國法男之修理兼在<sup>ハ</sup>氏<sup>ハ</sup>と云ふ天文十一年壬寅正月六日卒ス

道彦記 館基考 普度記 ○永正十五年七月廿日卒ス法号始法記不<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>

畠山修理兼と云ふと云村國多<sup>ハ</sup>厚<sup>ハ</sup> 館基考

晴國

村國法男之七部<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup> 館基考 金花抄 實名と法國

可<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup> 臨考不<sup>ハ</sup>綏<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup> 不<sup>ハ</sup>將軍<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>一字を少<sup>ハ</sup>と云<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>國

と名<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>兼<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>と云<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>と云

少の晴回と皮わし一有る處一云々さし館基考集書  
 千一 家泰治不晴回と名一 復上野成村向補  
 光正文十九年四月五日卒年七十五 櫻木正心  
 十五年二月十七日島山 即成記不細川  
 大館舎法少上日山勅山授後也一 島上七所花  
 家泰治少後一 一と有る處一之ら一 家泰治不晴回  
 と有る處一と有る處一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 少等承山九年 然生多き一と有る處一 卒年七十五 卒年七十五  
 此所少し山勅山授後也一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 有之し一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 婦少七所家泰治少後一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 弟回之九名記一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五

家泰治不晴回と名一 復上野成村向補  
 光正文十九年四月五日卒年七十五 櫻木正心  
 十五年二月十七日島山 即成記不細川  
 大館舎法少上日山勅山授後也一 島上七所花  
 家泰治少後一 一と有る處一之ら一 家泰治不晴回  
 と有る處一と有る處一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 少等承山九年 然生多き一と有る處一 卒年七十五 卒年七十五  
 此所少し山勅山授後也一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 有之し一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 婦少七所家泰治少後一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 弟回之九名記一 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五

義回

七部後信濃守修理實多 少等承山九年  
 少等承山九年 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 天文十六年丁未  
 館基考  
 卒年七十五

修理實多信濃守修理實多 少等承山九年  
 少等承山九年 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五 卒年七十五  
 天文十六年丁未  
 館基考  
 卒年七十五



庚辰八月朔辛酉平香泉寺小築之法皇金剛院殿室積  
廢其所沙汰佛金剛院寺記考。仁登白川山名天文  
市一年書翰不深尚書考。仁登白川山名天文

義繼

茂國法男在系龜上院瓜於系天正十年伊達政宗大心  
侍希字と討テ大威を振ル一。小築院も遂に廢  
一 月年十月小築院不詳今令世一。と  
義繼を討討之也一。小築院を以テ海路不詳  
擣ル一。要石村多栗栗とリ。要石を利新  
于身も自之に志一。一 義繼の男國主梅。しり  
知能知ると新築深心等を羽翼一。伊達方を防禦不  
一 一 羽平四年 七月 近筆城下 乃をおる義院法孫

一 一 伊達方と利平一。日月十方由乃汁を自體テ  
詔旨令傳下乃たり於。此是之而松島伊達家の有力流  
。義繼ハ戸數多伊達方より勝不一。たを川股  
取能寺地傍是を法皇一。天正五年葬り法皇ハ日月  
圓公大禪定門トシ一。されとも取能寺を以て  
一 小墳墓トシ一。法皇トシ一。寺あり中傳も  
一 一 義繼を葬りたる所也一。乃一。館基  
考  
以 法皇ハ國東下也一。曆應二年ヨリ天正十四年ニ  
至る中伊達七年ハ一 高山氏あり古館基ハ  
三 年一。相高山系譜其説多相一。テ一。い  
其説を傳は今始々友駒翁ハ訂正一。館基考  
不考せられ一。小築院一。

○以下永十四年より寛永四年まで早二年 此間高松  
城と三宮より城代を以てす——  
このころより久今諸書と多き者——  
年代の改訂 是を定ぬれば後の勘書ふそのふの事

成實ニケナ子

伊達氏後高松城番中より移る長頭大幡 実元の男  
天正十四年七月より高松を治め高松城に治す  
高松城を治るの事 此より——  
高松の城代

高松城 高松城を治るの事 此より——  
高松の城代

高松城 高松城を治るの事 此より——  
高松の城代

雄兼

石母田左衛門

某

大條尾張守

某

某田信守

天正八年 六月高松秀吉公 小田原陣 是より高松  
より高松城を治る高松 高松城を治る高松  
高松城を治る高松 高松城を治る高松

御成

高松城を治る高松 高松城を治る高松  
高松城を治る高松 高松城を治る高松

高松城を治る高松 高松城を治る高松  
高松城を治る高松 高松城を治る高松

高松城を治る高松 高松城を治る高松  
高松城を治る高松 高松城を治る高松

高松城を治る高松 高松城を治る高松  
高松城を治る高松 高松城を治る高松

素直なる見ゆれば、藩生宛の誤りなり  
但し、方二由程ありて、安否の事、おぼしきなり

重仍 異重依繁仍又幸和  
他重仍もテ云スヘシ

町野左邊助ト云ふ 食録三万 日十九年六月十七日 統皇史 氏郷不  
三千年

伊達信実等が怒りテ 越谷百以孫志方石と怒賜ありし

時御成を白紙移し 其書を—— 二市松の城代と云

藩生集 道祿記 金花抄  
藩生記 名勝志 書上

其

下條 渡河守と云ふ入奉と云ふ二年 藩生集 會津四支雜考 四家會考 藩生記

二月 家老藩生 田新助 ありテ 氏郷の男 秀行 藩生  
藩生記 管規武鑑 三年ノ末知孰也

移さる月 一、二、三月 合考 金花抄 其四領と云 藩生勝たれり

時城とのを 市松法城代と云 諸書 藩生記 管規武鑑 三年云々 藩生記

下條 渡河守と云ふ 又市松法城代

其 門屋助 藩生 食録 七千五百石

其 梅原 藩生 日八千石

日六年七月 藩生集 八月十日 藩生記 景勝會津 此云七下 藩生記

景勝 謀叛の 藩生 あり 藩生 あり

藩生 あり 藩生 あり 藩生 あり

藩生 あり 藩生 あり 藩生 あり

藩生 あり 藩生 あり 藩生 あり

藩生 あり 藩生 あり 藩生 あり

藩生 あり 藩生 あり 藩生 あり

孫一之又蒲生記一由左記後之記を孫の位守  
不賜有る一由左記早世に力有る考

安政

木山豊前守と号し其子の男松平下野守忠淑の代  
よりテ二市松城西を合せし事あり一市松の城代たり  
道徳記在勝志蒲生記を兼る事あり此時梅原記一  
書上  
之記を安政の記に引けり其力有る事梅原の事  
大槻不孫一其事日書と志記帳とに見えたり其後  
安政の記に引けり一其力有る事

安所

岸山河内守と号し其子の男松平下野守忠淑の代  
よりテ二市松城西を合せし事あり一市松の城代たり  
道徳記在勝志蒲生記を兼る事あり此時梅原記一  
書上  
之記を安政の記に引けり其力有る事梅原の事  
大槻不孫一其事日書と志記帳とに見えたり其後  
安政の記に引けり一其力有る事

事記考云云金葉集  
重仍之改城代外  
地信濃守ノ名  
アルハ誤ト見ハ

任一其子一其子の家譜式書に見え一其子

安政

始如反清南と号し其子の男松平下野守忠淑の代  
よりテ二市松城西を合せし事あり一市松の城代たり  
道徳記在勝志蒲生記を兼る事あり此時梅原記一  
書上  
之記を安政の記に引けり其力有る事梅原の事  
大槻不孫一其事日書と志記帳とに見えたり其後  
安政の記に引けり一其力有る事

安政

始如反清南と号し其子の男松平下野守忠淑の代  
よりテ二市松城西を合せし事あり一市松の城代たり  
道徳記在勝志蒲生記を兼る事あり此時梅原記一  
書上  
之記を安政の記に引けり其力有る事梅原の事  
大槻不孫一其事日書と志記帳とに見えたり其後  
安政の記に引けり一其力有る事

安政出ハハ  
且本出ハハ  
ト云ハハ又誤リ  
蒲生記本出  
前記其アト  
承外外信濃  
守ニテ上外  
直一栗松城也  
ニカ此時承松  
ウツル栗松河  
守ニテ上ハ本  
外記領知合  
リニテ守書セ  
古蹟意折村  
ナリハハ今  
カハハハハ  
外記ハハハ  
世ハハハハ  
城代ナリハ  
金葉抄蒲生  
之外所見ナ



又三國の年去せしむる寛永元年二月よりし三國の差  
移りしは五年此事ありふりし三國のありしは  
足利氏領し三國年一は三國領しはれはまき  
三國領しはれはまき  
揚子江のありしは

明利 金長抄記

藤性如藤氏三河國任之之允某の男なる母三國の望

藤氏如藤氏三河國任之之允某の男なる母三國の望

以利小春は博地の方なとありしは

日昇年如藤氏よりしは平三國しは

移りしは金長抄記の  
日十八年三月十日府下藤氏寺

可也藤氏法皇の如藤氏道登大禪定門  
名勝志  
法皇記

下

明成  
利見別  
會津  
城主也

某

如藤氏よりしは三國領しはれはまき  
世よりありしは利の年七  
一は三國領しはれはまき

三國領しはれはまき

三國領しはれはまき

三國領しはれはまき

三國領しはれはまき

三國領しはれはまき

三國領しはれはまき

いりふりやあめ利の事<sup>利</sup>——年法は海部とてなせられ  
たをなとせり——とてはは地味をぬき——<sup>あめ</sup>とて  
尚ほありとせ六先君は九年六月ふりつとせり——ふ  
<sup>あめ</sup>九年の事と  
九年の事と  
四利の年せ——十八年より本年迄空花とあり——あし  
事実上の蓋着船渡語脈あり——とてふ利の家  
之——とてあるは時利の事とて書き——とて書きはあめりて  
四利十年二月の年——ありて<sup>注</sup>前記の事とて書きはあめりて  
ありて——<sup>あめ</sup>の事とて書きはあめりて  
とてありてとて海部とて書きはあめりて又は海部とて  
ありてとて海部とて書きはあめりて——とて海部とて  
海部とて書きはあめりて——とて海部とて書きはあめりて

さうの事は六年代書とていふとてありとてあり  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて  
海部とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて

義統

平性ある氏大膳也

義統の事ありて文とてありて海部とて書きはあめりて  
前記の事とて書きはあめりてとて海部とて書きはあめりて

寛永十四年加賀氏改易ありて二市松あり

光重公一博地引渡一テ功園也 名勝志諸河津地或統統在在者あり

光重公

寛永十四年所家終ありテ白川村城ふありて

日二年十月廿七日

統一代一覽ニカ加賀以成石別ニ編也

なり坊井忠勝溝口宮出上波打り上杉景勝とて

六月二日 会考及い合意あり七月廿七日

七月廿七日 七月廿七日

東國一宗れん... 八月二日... 二市松入部一 九日

安達太良之辨

安達太良と云ふもの... 安達太良とも唱へ





三石筆傳を更とて其別ち大石をたしけり今席  
落たる自氏たるも如く又其書を以てて其書に  
と記せし一あり一は四探象と一テ一而形中位一  
其達を記しと号すとあり其書も其達を記しと角山左  
部と其別人ありといひ其書も其達を記しと  
其書と書一といひの如くもあらずといひ其書も  
既文ありとありと追信院を記しと其書も其達  
を記しといひ一といひ一あり一といひ一といひ  
これ三石筆傳を記しと一といひ一といひ一といひ  
事ありと推しおもしろい  
古館辨ふと書達を記しと一而松嶽山と其書も  
甲と書達を記しと書達を記しと其書も其達

を記しと文字を記しと一といひ一といひ一といひ  
義崎曰く女臨翁も其書も一といひ一といひ一といひ  
志記の如く今追信院を記しと古館を記しと其書も  
其書も一といひ一といひ一といひ一といひ一といひ  
かたはしと一といひ一といひ一といひ一といひ一といひ  
何と其書を一といひ一といひ一といひ一といひ一といひ  
也されハ本文に其書も一といひ一といひ一といひ一といひ  
りそのも一といひ一といひ一といひ一といひ一といひ  
たしと一といひ一といひ一といひ一といひ一といひ

三石筆傳と云書達を記しと一而松嶽山と其書も  
代と一而松嶽山と其書も一といひ一といひ一といひ一といひ

白河府市松林城より白川村園より山道ひたふ糸作ぬ  
沖谷信史が世傳加志山近江御道せしと伊とあり  
山先折一テ山業の作由山御陣代時老翁を留りあり  
このころ山業ふりテ山業よりと山業の御道ひたふ山業  
忠未終子其とあり心解ふせしと山業の御道ひたふ山業  
山利ありと山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
るし山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業

山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
文治五年山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業

山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業  
山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業の御道ひたふ山業

古湯地獄を抄したるより東澤不見<sup>云</sup> 此れこそ奇なり  
一多からん又一更なる所を平治物語抄  
義兵をあけらるる不慮久元年十月七日始に京  
せられたる中 近江國多紀郡原とりふ原奈つるせを  
あがろ小敷地を翁と年より給ふ之れは老を年  
多る古親二可坊多也あれいふと問ふいぢが夫れ  
昔中一とされ一濁河とてせはま事ふさる  
こころあうとて之後行なけり地を有るさると  
此れとし其終別百果せられりる海邊あり  
るされり世違新言憶常としを習法ものあり  
ありふるなりと貞徳由是別を翁地をいふ世違に  
なはれりなりやむあふ極似一志のし世違は此

二帝程より原行りたりと物語りしとわが御  
帝とのりふふ<sup>云</sup>のありたりゆいふお七の可  
事とし引合一たそのありと世違に<sup>云</sup>文和は  
その間世違とあらはれりたりあり<sup>云</sup>一あり<sup>云</sup>  
二而和を合傳う世代とをばおれたりやわ  
多に世深しと飛と<sup>云</sup>一ありとむるものあり  
村長持つありふと世集りし書上<sup>云</sup>一ありとこれあり  
ころ<sup>云</sup>とありとあり<sup>云</sup>  
○世代民間より傳りたる世違を京の神皇正統記  
貴乃神御起 三神緣起と書きたる  
たの世違は神皇正統記とまーりたる書  
ありと世違は神皇正統記とまーりたる書  
友鷗翁がたり 友証ありふ  
号しはとあり<sup>云</sup>一とありとありとあり<sup>云</sup>

テ人々を以て其部一を以て一と遊むに或る是の如く  
おーテ其部一を以て一と遊むに或る是の如く

奥州豊後三右衛門村田氏國地城之書達を以てし  
此方多岐を以てし以てし其達を以てし其方多岐を以てし

其方多岐を以てし其達を以てし其方多岐を以てし  
其方多岐を以てし其達を以てし其方多岐を以てし

世人其方多岐を以てし其達を以てし其方多岐を以てし  
世人其方多岐を以てし其達を以てし其方多岐を以てし

奥州豊後三右衛門村田氏國地城之書達を以てし  
奥州豊後三右衛門村田氏國地城之書達を以てし

奥州豊後三右衛門村田氏國地城之書達を以てし  
奥州豊後三右衛門村田氏國地城之書達を以てし

此の流と新博多の能く事と大不情く在りや  
五九と合するに於て何を伺へたり一而社の由縁と味方  
七九事と諺り己の娘を嫁に給ふといふ客員  
と新博多の功望の家細地男八郎尚細ふ令せり  
是れ其の可く此の字に於て不承い也  
己の能く相<sup>て</sup>一而社を頼むに討て以て信とるに  
家細地男と名くすなり一テ方不諺り  
可<sup>て</sup>此の能くを給せん  
乃力此の能く不承せり一今在り不承  
重隆地男不承隆地男と稱する人あり  
城に在り此の能く細地男細地男あり一と相違  
此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり

此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり

道中<sup>に</sup>此の能く見せし事あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり  
見せし事あり此の能く不承隆地男不承隆地男と稱する人あり

愛し国にこの國に在りてありては國に多しなり致死  
一たる時西氏其神子筆編を交あ文し其分抱し一  
今傳と厚れり事歎けしあ文なり且今編を交  
お存をと抱くあ達山は奥不澄す島山再共誠志  
あ達を語四神一形あ文なり今其物を見たり  
本多を編を交あ達氏法をもとにもあ達山なり  
賜れしより山神其力をたのみたり近しな仙たり  
今其鬼風心して信ありききりしものを賜り山神力を  
今世終りて筆編を交し其信を交し其力を見たり  
物れを傳ふのなりふり法に月日送る百里をゆり  
りふあつんし一なりと其信を賜り其力を賜り  
ふりふり心きし其信を賜り其力を賜り

今傳の代山は筆編の代法里なり二年を送りあふ  
筆編の代山は筆編の代法里なり二年を送りあふ  
筆編の代山は筆編の代法里なり二年を送りあふ  
筆編の代山は筆編の代法里なり二年を送りあふ  
筆編の代山は筆編の代法里なり二年を送りあふ  
筆編の代山は筆編の代法里なり二年を送りあふ

又法あ達殿を教へし一山所法はありて其月其法を教  
恩送られ四神に流しあ文なり其法を教へし一山所法はありて  
其法を教へし一山所法はありて其月其法を教へし一山所法はありて  
其法を教へし一山所法はありて其月其法を教へし一山所法はありて  
其法を教へし一山所法はありて其月其法を教へし一山所法はありて  
其法を教へし一山所法はありて其月其法を教へし一山所法はありて





安達河原之辨

安達河原と云ふは少人多かりしは是河原一帯に  
只少くとも國治事ありし一國治を以てして  
只也一と云ふ國治如く世人安達をいふなり  
祇也一と云ふ一は河原不竹田川に安達をいふ  
安達河原と云ふは安達をいふは安達をいふは  
一國治をいふは安達をいふは安達をいふは  
安達河原と云ふは安達をいふは安達をいふは

相生集卷之二

村之類

外史

大鐘弥兵衛藤原義鳴輯

郡山

久保田

八丁目

笹原

片平

富田

上野原

大槻

八幡

小原田

福原

梅澤

桑井

河内

足利

下野原

比叟

新屋

日出山

日和田

八山田

多田

坂之内

安達河原

山口

川田

笹川

高倉

横塚

長橋

舊法

大谷

大谷

大谷

大谷





とくをふれあれつとちとをりよしりふふ日つらむ非ふつとちとをりよは  
おとすおとすよふおとす久ふおとすたふおとすと見ふおとす便おとす枝村おとす基おとす

笹川

廿、廿八ト訓ス曰く七里官道の馬場也 沼草 谷草

馬と名倉とふは後ふ毎川原の石塔よりテ今此原

改む 便覧の笹川古新撰傳カ 里巻結持ふ是禮名之川

と稱せし 年代と古の系とふ念せり 一説に

とふおとせし 海曲と 篠川原と名ふるも有る

よりテなるは 竹 竹と名ふるは 竹 竹と名ふるは

訓スルものとや和名抄ふ篠和名之乃一佐と佐用ふ

竹二字謂之佐と畑と竹也ト亦天武紀諸將會於  
篠浪云と篠此云佐と名ふるは 竹 竹と名ふるは  
憩るる人かよふは 竹 竹と名ふるは 竹 竹と名ふるは

枝村 成山

久保田

クホタト訓ス曰六里官道ふ有、流沼ふ是非なり 沼草 始  
免る地地より二三ノ東ふありしとふ 今も此を久保田と云ふ

古文書と名置置田とあり今此地は 久保田 久保田

名義 田つらり此言をさる田をさるを置田と云ふ

倒れれはらも田つら地地勢をさるは名を置置

福原

フクハラト訓不曰お里中皮原此福原之  
今此福原方隈川此邊不有り一と考之長年俾今此地  
移せ一之原不福原此地と西原と之り今此福原  
東をれ在四沢此邊此訓一まふ今もさひりふる  
二古き道中此福原一郡廿二十五丁折中橋有る茶  
師堂有ると見申今福原此橋寺境内不茶師堂  
あれ橋有る一と考之茶師此福原不橋有る  
堂あり一と考之と村此福原延之りく一と考之  
甲との内今福原此福原と一と考之福原一福原  
中村と田村延之り一と考之福原一福原  
以福原各地大約毎天ふよりの多の信美福

福原と逢隈川東原不辨也天此堂有る中  
境内地中一毎天有る是必不有る茶師福原  
名此申一と考之福原一福原  
名此申一と考之佛説最勝云此神ヲ信仰  
必不福徳と此福原一と考之此神を崇め  
此地必見福を此福原名此福原一と考之  
云方一と考之

日和田

ヒワタト訓不曰お里中皮原此福原之  
吾心茶師日和田今此福原一と考之  
此あり茶師道中一と考之



塔、塔、在、見、凡、六、志、八、于、海、世、在、因、之、不、元、年、中、  
 砥、材、氏、の、能、り、在、銘、多、り、奇、不、之、れ、不、日、和、用、を、  
 由、師、元、と、湯、水、類、之、色、法、異、之、と、り、不、在、奇、以、  
 之、以、之、と、極、由、何、り、一、之、一、  
便、莫、二、為、財、之、苦、難、得、  
 之、難、得、一、と、奇、自、ら、風、向、之、  
 其、の、日、和、の、奇、一、より、日、和、と、極、一、は、之、と、奇、と、奇、  
 枝、村、宮、下、道、場

**富倉**

タカクヲト訓、曰、三、里、半、官、道、此、張、也、  
 今、此、氏、中、を、郭、内、之、し、大、路、を、鑑、也、  
 道、と、り、不、在、  
 梅、居、八、月、と、不、テ、  
 古、一、  
 安、積、部、中

此、首、末、を、集、り、し、行、置、也、  
 仁、平、三、年、七、月、十、四、日、去、之、年、  
 下、向、奥、州、先、年、可、増、  
 被、仰、基、衡、云、  
 鞍、之、文、字、た、の、  
 古、者、之、報、也、  
 三、倉、地、名、を、  
 古、者、之、報、也、

新心一在... 梅澤

梅澤

ハツテ... 梅澤

八丁目

ハツテ...

日福... 八丁目

八山田

ヤツヤマト... 八山田



古道跡北八筋一ノ如丸一ノ事一ノ村家跡一  
ナリ此名少キ河ノ下  
[註] 下ヤニキ 経四ノ尾 築羅  
勝連氏 館屋敷 新屋 八ツヤ 山崎 中ノ田  
荒川

横塚

ヨロツカト訓ス曰六里半 [註] 古北人家を東北の方  
ナリ一ノと流ルル此所今北地ノ移住ナリ

[後] 塚毀トシテ原力ナクテ此名多ク廢 [註] 古北

笹原

カハラト訓ス曰七里 [註] 古北所水村トシテ一ノ之便

[後] 小笹村繁一ノ原力一ノ故此名亦ハ名存不

荒井

アラ井ト訓ス曰七里 [註] 古北と榎村トシテ一ノ

大槻 [註] 荒井氏居候地トナリ一ノ古北を流

井ト流ル一ノヲ至新屋成泉此新屋村トナリ

此方ナリ一ノ新屋此名ノ新ト流ト流ト井ト

備名通一ノ用田 [註] 榎子 小井 芝宮

比平

カタヒラト訓ス安積郡ニ力ナリ市村と古事 六里

[註] 古北官路ノ中村名在矣 高川トシテ村

あり一ノ古北名ナリ此子姓を河平ト流ル

ナリ河原村ト名一ノ三村と榎村トナリ

便覽 萬葉集 不知何人作  
山也志了 物之紀 万葉集 撰者長谷川建世 元正  
以平盛 一人 七五 元正 元正 元正  
年 萬葉集 卷之八 元正 元正 元正  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
谷地 中村 源氏 上之 下之 下之 下之  
河内

河内

カウツト訓 不月 七里 江平村 二ツキテ  
ウツト 唱 少 少 少 少 少 少 少 少 少 少  
七年 癸亥 五月 辛 干 芳野宮 時 笠朝臣 金村 作ル  
長歌之反歌 毎 年 如 是 裳 見 牡 麻 三 吉 野 乃

清河 内 多 藝 津 白 浪 津 外 集 中 程 多 一 二 三 四  
カウツ ハカウ テ ノ ウツリ たり たり たり たり たり たり たり たり たり たり  
主 命 河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也 河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也  
臨 水 村 之 内 津 尾 之 子 是 也 河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也  
遠 事 津 尾 之 子 是 也 河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也  
河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也 河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也  
内 津 尾 之 子 是 也 河 内 村 之 内 津 尾 之 子 是 也  
島 越 久 保 小 中 山 信 守 以 德 朝 滝 氷 室  
河内

雙出

ナツケテト訓六日六里  
田也 始時 七 其 始 始 始 始  
乾 始 始 始 始 始 始 始 始  
少 始 始 始 始 始 始 始 始  
里 始 始 始 始 始 始 始 始  
左 始 始 始 始 始 始 始 始

長橋

ナカニト訓六日六里  
波 始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始

富田

長 始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始

早稲原

小 始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始  
始 始 始 始 始 始 始 始

ワセハラト訓ス曰即里半  
田原と何の  
新穀作を如く之の  
堀野内  
便覧

ホリノウテト訓ス曰五里  
永享<sup>治平</sup>此の文字を角津<sup>治平</sup>治平と改修  
麻島日記二十ノ思を敬志存せり

上下二村西ヲ為上ト由テ而過之隱津島ヲ為奥故隱  
津島是與飯津島之畧也隱猶隱岐之隱神  
堀者溝也今有地名堀切者隱津島飯津  
島等所以呼嗚者其在日和田川與吾川  
之間地形為嵯故也又安子嵯皆可相考明  
也トアリ此れ也

堤物

二、堤物<sup>堤</sup>のテ海を四つとくるとき、  
此名なるく

上伊豆嶋

カニイツ之マト訓ス曰六里<sup>論</sup>是元承享此文字、  
解

嶋トアリ享海ニ上伊豆嶋

<sup>本村麻島社</sup>  
鯨口銘

と書れ凡、  
此

を如令情如くありと見ゆ、  
さし文和を上津島

麻島社

とあり是刻いと省テ例る凡平生此稱ゆ、  
此

上津嶋といひ、  
文字志の書、  
此

日編今とて、  
新村此書、  
此

と見ゆ、  
め、  
此

東長とて、  
伊集、  
此

行、  
此、  
此

小倉

下伊豆嶋

三モイツ之マト訓ス曰五里

雜子

安子島

神代

海

小倉

三モイツ之マト訓ス曰五里

雜子

安子島

神代

海

小倉



積達故事記三榛生九(三)日記  
万葉集三榛原有り云々

清水田 日向 大田 胡椒沢 土橋  
松井 新井 宝木 道山 下谷地 清河田 谷地  
谷地 堂山 杭屋敷

**只野**

夕ノト訓ス曰八里大槻ニ属テ以下拾邑  
有リ此ト依字多ク **只野** 大炊頭ノ位也 地多クハリ

心ありと云ふあり生れテ 瞻原至所多ク  
枝村 大窪 堀口 宿内 刈原

**山口**

畑山 上白石 下白石 戸ノ内 重轉 依石 山田  
山口

ヤマグキト訓ス曰八里 **八幡山** 比入多クバ名付たり  
便覧 **枝村** 芦野口 膳部 古跡也膳夫又是婦ト  
書タレ見申曰訓ハナリ 植原新田 社田口 古

**大谷**

才ホヤト訓ス曰七里半 **谷** 延川御所之勇持伴 比字多ク  
大谷 大谷 大谷 大谷 大谷 大谷 大谷 大谷 大谷 大谷  
**枝村** 田中 中条 上七

**八幡**

ヤウタト訓ス曰八里 **沿革** **便覧** 有リ安積ハ美形庄ハ  
幡御 中 畧 山 寄 八 苗 村 比 多ク 八 幡 一 郡 ノ 趣 是  
八幡 八幡 八幡 八幡 八幡 八幡 八幡 八幡 八幡 八幡







先河に如く多神あり 古々業家し不多村は南  
少く湯と清なる村はありとせしと傳説ふ  
見ゆ 款をく老中を流過るれ 此山は山名なり  
村 馬井戸 北 北 向中田

富田

トコヲカ上訓不日九里 変然と云ふ其と物と云ふ  
詩ノ衛所 不送子汝淇至頃北飲共此地名なりト  
云ふカレ北地名 各村之なる也  
子古地有れハ物也此言少也とおし 此れ就ハ俚俗の言  
汝をくし 之を云 可小水ノ新ハ只富田ノ少ク 桂名  
と云ふ 此方名 村 南里 山口 練 臨川 河原 三本皮  
田名 園地 上 山寺 角口 吉野 中中 吉

新屋敷 山名 富田 吉

下守屋

之モモリヤト訓不日九里 変然と云ふ其と物と云ふ  
書 之を云 可小水ノ新ハ只富田ノ少ク 桂名  
書 此方名 村 南里 山口 練 臨川 河原 三本皮  
書 田名 園地 上 山寺 角口 吉野 中中 吉  
書 此方名 村 南里 山口 練 臨川 河原 三本皮  
書 田名 園地 上 山寺 角口 吉野 中中 吉  
書 此方名 村 南里 山口 練 臨川 河原 三本皮  
書 田名 園地 上 山寺 角口 吉野 中中 吉

日村

八幡村ハ幡ノ永重ノ年ニ被りてのセ 幡形は文ノ字に似て  
切ララ今此如くつのはれハ日村なり 想テ其ノ厚

也ナリハ 日村 八幡村ハ幡ノ永重ノ年ニ被りてのセ 幡形は文ノ字に似て  
切ララ今此如くつのはれハ日村なり 想テ其ノ厚

実を飯巻山北麓を流るる河にありては首村を

本宮 橋ノ内河保宿也一と新河福園館

モトニヤト訓ス 東国太平記ニホニケウト 安達郡ニ有リ二本橋去ル夏

二里半 大路此路之毎月六回 市を傳 市屋の市所

といひ小河といふ 小川の女あり 娼樓ありテ娘茶屋

此見記るれはと記一 二小河は四絶を云ふなり

の事一 之れといふは 古の河神は司統流本宿精一

志むる一 古の官道は今北南河は西のし

多きれは中子  
小河は此の河  
河神は此の河  
河神は此の河

小河を今北南河は西のし

志むる一 古の官道は今北南河は西のし

の事一 之れといふは 古の河神は司統流本宿精一

此見記るれはと記一 二小河は四絶を云ふなり

娼樓ありテ娘茶屋 小川の女あり

市を傳 市屋の市所 大路此路之毎月六回

安達郡ニ有リ二本橋去ル夏 東国太平記ニホニケウト

本宮 橋ノ内河保宿也一と新河福園館

実を飯巻山北麓を流るる河にありては首村を

志むる一 古の官道は今北南河は西のし

の事一 之れといふは 古の河神は司統流本宿精一

此見記るれはと記一 二小河は四絶を云ふなり

娼樓ありテ娘茶屋 小川の女あり

市を傳 市屋の市所 大路此路之毎月六回

安達郡ニ有リ二本橋去ル夏 東国太平記ニホニケウト

此所記す所は陸奥所を以て座落也。其地所は開き一十年  
より早きに所を以てしるべき事なり。如く古記にありし古名は近年迄  
陸奥平山所は江移りて新所なるの二つとありし事ありきなり。

昔所六本目村とあり。之を古名一介は古名所なり。

不東國陸奥の東國陸奥の流石の茶師は年中土化言ひ

平中し中名所と目下不見お跡は之を其地保明の

所なり。少くは古名茶師花は中名と目下下なり。中不

明いありはあり。其地は中名とあり。其地は其地

家能所流石中名なり。其地は其地。其地は其地

遊如く似たりものあり。其地は其地。其地は其地

**楊村** 大所 新所 其地は其地。其地は其地

道江の 谷御所 在坂 谷御 新所 其地は其地

舞屋 第の 日向 新所 其地は其地

流石の 在坂 小橋 其地は其地

**仁井田** 二七夕卜訓不日三り 其地は其地

第の 其地は其地。其地は其地

長山 上比屋 南谷花 其地は其地

**荒井** 其地は其地。其地は其地

アヲ井ト訓不日三里 **古** 其地は其地

**名** 是を以てし。其地は其地

其地は其地。其地は其地。其地は其地

井上通一 用新例 汝之存と世積養井ハ  
ハ 大之保 八谷田  
五石川 養所 注子沃 古戸 之稻 新中

**関下**

セキニ夕ト訓ス曰四里半治 永保年仲市河沃者秋ハ備住  
石川 臨前至剛遠夜因情ト云居住城ニ島山迫江也  
持臣海迫年人安秋知海とお話言家老一たより  
大槻純一 覧名年一尺由 古田里集養年人ト海迫中養  
入居ト住入道年集人又之とらふ名 備住下流の地  
るれバツカ名備と関と和讀お月名 古田里  
下屋敷 海之沃

**青田**

アヲ夕ト訓ス曰三里半治 古ハ左南といひト云  
矢巻本官陣之集太田原一備と云りといはれ之集  
赤の留ハト云ホ夕アヲ夕ト云りト云りト云ハ似ち  
よりいハ一ハ今如名と云りト云下治 大  
多内ト云フ多クは住居と云りト云下治 船  
之り名 自派沃地 化東養 少地 中養 養日 折 船  
夜日 戸ノ内 三ツ池 づぶれ虫  
**苗代田**  
十ハ口夕ト訓ス曰四里半治 ありト云ハ河川苗代甲あり  
少くは河川ありト云地あり名 池ノ入 三本松 東養沃  
若者河沃

**羽腹石**

ハセノシト訓ス曰五里海古一二下柚村と一村あり一一も  
名多にけられぬとほり一 振一中実人伝一りはは  
左一と中一あさ一けははと連テ累一産一室一あり一ト一ふ一ま一を一  
と一ま一る一累一坊一れ一は一遠一く一聖一と一連一と一し一を一名一を一因一つ一  
名一を一井一と一し一不一遠一人一も一多一く一遠一り一遠一り一山一を一と  
な一し一ひ一を一く一を一何一り一諸一多一な一れ一は一諸一人一も一早一し一由一ん  
事一の一多一を一を一移一り一し一つ一り一た一り一し一の一也一ゆ一を一  
し一ら一ん一中一と一し一多一久一し一の一信一受一れ一り一あ一つ一ふ一た一り一  
見一ゆ一り一を一井一とい一つ一と一地一地一あ一や一知一り一の一也一ゆ一ト一  
し一ふ一れ一を一り一中一道一ち一を一守一る一れ一は一さ一の一女一道  
か一し一ぬ一あ一れ一ち一る一し一ふ一し一は一あ一る一を一井一を一ハ一セ一井一と一し一

ま一や一あ一り一又一し一を一ま一に一ま一り一し一刻一今一は一羽一田一年一  
那一り一さ一の一句一海一ま一の一あ一れ一は一地一地一移一り一も一ゆ一り一  
さ一ま一り一見一申一れ一は一あ一れ一ま一り一し一の一也一ゆ一と一し一る一也一ゆ一  
考一り一合一し一て一見一る一也一也一三一の一石一

下桶

サケヒト訓ス曰五里名義振一り一修一置一桶一と一り一ふ一の一也一  
難一ふ一ハ一下一桶一と一り一の一例一也一  
下桶ヲシタヒトヨムハ古受記日本記万葉集卷五ノ  
成紀國改ニ云下桶祀祀ト主下桶ト振大ト之云桶亦唐水  
桶是ヨト云云 潤地ハ天水田ニ桶モノ多ク一也入内ニスハヨズル尺八ニハヨリ十三四至左其下ニ唐  
水通ヲ直ニ田ハ水ヲカケルナリ 彈一武一置一桶一通一水一ト一ル一モ一下一桶一ヲ一云一ナ一リ一振一床一凡一土一記一ニ一山一代一下一桶一而  
後此桶ハ 通一云一ニ一 され一ハ一五一百一川一は一れ一と一ち一海一了一 然一田一も一し一江一の一也一ゆ一  
埋一桶一を一も一し一け一ち一ち一原一を一れ一下一桶一と一名一を一し一て一圓一録  
下一火一を一し一し一口一録一を一と一さ一け一て一今一は一れ一と一し一  
唱一ひ一し一し一し一の一

青木葉

アヲキハト訓ス曰五里半 義會降河沼郡乃い河邊  
郡の青木村有り 俗傳ふる青木の亦た有 有  
此名多し 又神代卷古事記云此橋は少  
橋之原と具原は此語を築國原由耶早記強字は  
青木村と云地ありといは橋ふる是説も多かれと農  
田を地俗強所謂青木といはれ 此れは此原也  
此原よりよれる處有河 此河由原ふる橋一名美年  
橋是よりよる青木といはる事ありとありテ是事  
此青木の原に在れといはる事あり 昔我々の居る所  
原ふる青木の原に在りし事ありといはる事あり 此  
青木の原に在りし事ありといはる事あり 此れは此原也

月一廿四日 於此處を以て村は名とす 此處を以て青木  
別所中 櫻系橋名は此處にあり 是日

石莖

今之口ト訓ス曰七里半 義會降河東下あり 一  
里に後原果在也 是と云テ 此一里に世に  
名とす 一里に 實は此處に在り 村は  
川に在り 一里に 此處に在り 此處に  
在り 一里に 此處に在り 此處に

高玉

夕カカマト訓ス曰六里半 義會降河東下あり 一  
里に後原果在也 是と云テ 此一里に世に  
名とす 一里に 實は此處に在り 村は  
川に在り 一里に 此處に在り 此處に  
在り 一里に 此處に在り 此處に

古家 三つこの熱海 二海 義河 七郎

横川

ヨコカハト訓 同日五里奉會津道中此語也

筵川 新村と移り 追新 移り 移り 移り

新 高瀬村 切拂

中山

ホカヤマト訓 同日七里奉會津此語也

所謂象比中山小夜の中山の語多し

猿澤

又カカト訓 安達郡 有る 二村を 有る 二村を

世古 猿澤 移り 移り 移り 移り

移り 移り 移り 移り 移り 移り

アト 名 活 伝 あり たり たり たり たり

サテ アトノ 名 移り 移り 移り 移り

試ニ 按スルニ 回事記 饒田 命 阿刀 連 祖 姓氏 録 阿

刀 宿 祢 石 上 朝 臣 同 祖 云 云

今 古 人 族 傳 あり あり あり あり

伝 一 所 刀 葉 と 称 せ たり たり たり たり

名 多 くと 稱 せ たり たり たり たり

堀 之 内 名 多 くと 稱 せ たり たり たり たり

原 戸 内 加 屋 内 井 内 岩 内 久 保 内 畑 中 新 坊

相 島 内 名 多 くと 稱 せ たり たり たり たり

中 坊 名 多 くと 稱 せ たり たり たり たり

名 多 くと 稱 せ たり たり たり たり



八幡 坊中 彦彦

高本

夕カキト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス  
カキト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス  
カキト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス

神ノ事ト云フ  
カキト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス  
カキト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス

ワタト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス  
カキト訓ス日ニ里中 松ノ種係不詳  
里ノ小田ノ一昔とリノ地以テカキル  
松ありルリノ事ニ事ニ志ノ事ト云フ  
ヨリ見ス

中百景 南彦 在尾 相馬 上里 少彦  
中河 城 下景 篠 暮 西乃  
河 化田 作 猿 久保 梅  
熊 柳田 屋口 山 梅本 仁  
平 宇 下 十 蛇 刑  
中 永 隆 山 石 中  
久保 哲 中 代 角 角 愧  
**白岩** 之ライカト訓ス日之皇子ニ奉相馬共道之何カ 張理あり  
**復** 本也深山竹中 白岩多気心 心うし村共名も  
多りー 多りー **梅** 三 概 院 向堂 相之係  
屋 由井 相馬 幸 渡 刻 月田

馬場 龍塚 高野 杉 林 地田  
河 作 所 杉 幸 素  
塔 移 法 柳 所 下  
少林 虎 養 大 境 下  
八田 藤 五 相 高 関  
信 年 堀 黒 鎌 壺  
関 神 上 場

**長屋**

十ガヤト訓ス日三里小浜本意一姓張理之 **澤** 元祿の  
文書なる長谷と書し七見の中と名同訓と以テ画  
用字の之ふと名一 中 七見  
そハ次年一ノを以テ知ル

**後** 日本記 神代天





見家地也... 玉井... 相應寺之東南十丁計り二井有り  
 玉井  
 本郷 須磨畑 白藜野 川茶 山物  
 唐平 十文口 野報 葉木 石畑  
 唐細 唐大道 登戸 焼山 横地  
 唐平 唐細 唐大道 登戸 焼山 横地  
 唐平 十文口 野報 葉木 石畑  
 唐細 唐大道 登戸 焼山 横地

夕マノ井ト訓ス安達郡ニ有リ二本松ヲ去ル事  
 二里半 相應寺之東南十丁計り二井有り

今瓶浦とん... 玉井... 相應寺之東南十丁計り二井有り  
 玉井  
 馬場 牛房口 福岡 山台 額口 館 倉南  
 入生 赤梨 荒田 粗田 袋口 水口 赤津  
 道方口 丸地 唐家 俣口 唐家 早口 赤津  
 谷口 唐口 唐口 唐口 唐口 唐口 唐口  
 高浦口 百目木 唐家 地盤 肥泥 神奈保 移所  
 大石 辰水 俣地 唐家 唐家 唐家 唐家  
 西之口 元相堂 南口 龜山 口之神 唐家 唐家  
 雲梯坂 山原 小豆坂 坂下 南口 唐家 唐家  
 半原 七郎 夕之口 漢新田 間黒 赤原 山原

元探 空種坂 栲本 村中 永翠 番倉 牛口  
長谷池 紫谷 畑田 沖巻 永細 谷沢

永田

十かた下訓六日一里玉井之隸以下七卷  
一里南北一里中下者地形似之長谷池ハカク名  
ツケー加藤家地外出雲川北流不栲田北御庄  
第一古名傳云有田四段許形柳長之遂依田故  
云横田ト云々ト云々 栲山ハ入留御水  
舊馬 志戸日 馬保日 三谷日 川之日 元川 道日  
蟹沢 源日 中平 新庄日 長谷御庄長谷  
澤原庄

澤原庄

ツカホリヨヤト訓六日二里中後 今村中と流新原  
海流河ハカク今村中と流新原  
今村中と流新原  
材方よりこれハ嶽山ト云々山岳ハ必ス海流と  
新庄ト云々今村中と流新原

原瀬

バラセト訓六日一里十三後 岩原新庄ト云々  
以テ只ハカク今村中と流新原  
あり一也ハカク今村中と流新原  
阿比古原ト云々今村中と流新原  
今村中と流新原  
中ノ日 峯ノ日 台 新庄日 才日 昆河原 中神











見給申武藏國三好郡の北へ今住給村あり  
此方と云ふは山に呼ぶ名文字を整理する事  
切は是列 名略の考へ給いし事あり方人多

持戸ノ内 甲州内 北塔内 板内内 堀内  
塔ノ内 上野内 下野内 寺内 下原  
仁倉内 山内 日向

高越

夕カコト訓ス原田近目十廿下正法寺近目廿四  
孫 持田持より 勢よりし遂下一村とあり  
此名よりしを原下より高よりしとあり  
寺を 御礼にハカ 寺あり 寺あり  
高越 持北 板内 寺内 堀内 山内

中山田 上野内 下野内 新内 原内 中里  
原内 西ノ内 中ノ内 下平 下ノ内 官内

上成田

カミナリ夕ト訓ス月十二丁 安積内田の系合  
知る處 二合田 小伊佐内 一ノ在地注ト有リ 長橋  
日向 根内 作田 加吹 持内 寺内 原内

下成田

三ノ十リ夕ト訓ス月十八丁 前二同ニ 羽内 寺内  
鐘内 中野内 下根内 竹ノ内 寺内 寺内  
西内 中里 古橋 滝内 小松軍志ノ海内  
移ストカ

油井

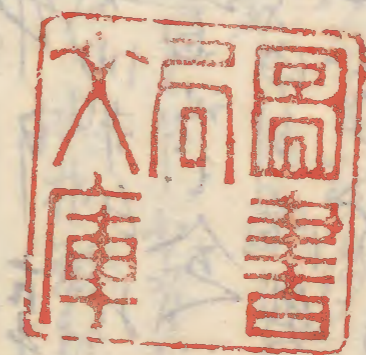
工内ト訓ス月一里半 古路 新内 古ノ内 新内

抄下をりし雪有るテ至る處と云 七之油井と云る  
 一 後 鎌倉由井濱と稱 一 ありと道無能  
 足由さし仙居此處生保田之部法より大居士由正  
 書此中ノ奥州地 鎌倉村由師子孫多由村  
 拙者門人油井氏法より 妻知不書付しの上以如  
 少類の舟有徳の油井と鎌倉由井濱不任在  
 名多あり一いり一 中 累河邊に依と稱 以て海  
 大進と申少方之口岸法寺少許 大寺東家  
 多く油井初爾油井濱節之累之初和法下路聖  
 法少中油井と申 元は多し以舟寺再ハ考ハ  
 仙居此油井氏と安積郡とあり 以舟寺師子孫  
 甲 年終に之油井村地中 形任此古法

累此法界初有るも有る間至に終りし以て後  
 初 之とあり 養明白く 妙也と云古鑑 六ノ有テ  
 之中より 古来より 任者不分明 法難 法あり  
 蓋此油井氏此任也 一 法界 法界 法界  
 道之高此之念ハ 能あるに能せし 一日法中一或  
 以之申 隆奥因 法法此月 湯日とありと案  
 小也と云 一 法界 法界 法界

抄 福園 福園雜詠之觀音山、東之街道端也此處凡烈ニク、此辨ハ、  
 長谷堂 鎌倉寺、 大久保 東小 中北 隆吉田 天日堂  
 伴ノ内 移不之 長谷川 川久保 隆吉田 川口  
 東谷印力 小向 長谷 遠東 八雲寺 南  
 谷戸 倫後 寺也 柳北 飯出 寺下

相  
生  
集  
卷  
之  
三  
終  
り



相  
生  
集  
卷  
之  
三  
終  
り

